



今話題の「功名が辻」。山内家一門が、香我美町山北の地で棒術を教えて以来、その伝統を現代に伝えるのは『棒踊り青年団』です。山北地区の男性なら、一度は経験する棒踊り。その魅力を紹介します。

みかんの香りに包まれる

十一月十八日は、毎年香我美町山北の浅上王子宮あさみおうじみやうで秋の大祭が行われます。その目玉は青年二十人が二組になって陣営を組み、打ち合う二十人棒です。

棒踊りを伝える『棒踊り青年団』

には二十歳から三十四歳までの若い人材が多く在籍します。二十八人の団員をまとめるのは棒の『先やり』、田村稔さんです。

「昔は未婚の男性だけが打っていたが、今は既婚者も

参加しなければ人が足りない。社会人になったと聞けば、まず勧誘に行く」と田村さん。

三十五年前に棒を受け継ぐ人材が少なくなったのは、

集団就職や都会への勤務で地元から若者が離れてしまったからです。しかし、山北みかんの景気が良くなってくると農業への転職や、町が誘致した企業への就職が増加し、人材も徐々に増えてきました。また、十六年前から地元の芸能文化を知ってもらうため、小学六年生に

なると小棒こぼうの奉納を体験させ、棒の持ち方や打ち方を団員から指導されます。現在青年団の中には小学生の時、小棒を経験した若者がたくさんいます。



小学生を指導する田村さん(左)



十月下旬から始まる練習

の後、メンバーの親睦と結束を深めるため毎回『お客』が催されます。

「先やりの大事な仕事は、毎夜のビール集め」と田村さんは笑いながら話します。

三年前の放火から新たに

再建されたお宮でこの秋、青年団のひとり、山崎淳さんが祝言をあげました。慣れ親しんだこのお宮に愛着をもち、この場所を選んだそうです。地元で農業を継ぎ、今年の春から山北みかんを作っています。

青年団を引退した人も、現在の団員に棒の指導やビールの差し入れを欠かしません。「今年の棒はどんな棒だろう」と、かつての先輩らも祭り当日はお宮に集まります。

地元で愛されるこのお宮には、これからも地元を愛する若者がたくさん集まることでしょう。

編集後記

来月に掲載予定の有宮神社の取材、初めて行く場所なので、不安ながら車を走らせていると、左手に発見！ほっとしたのもつかの間、階段の多さ(私だけが感じたのかも)に「ハーハー」、なんとか境内にたどり着きました。

各学校の子ども記者から寄せられた感想に広報担当として「そつ！そつでねえ」と、つい仲間入り。取材すればするほど、あれもこれも載せたくない「紙面の都合」の絶対的な権力がうらめしい。でも、紙面に載せることができなかつたことも私の宝物です。(井)

舞川で開催された「北部ふれあい運動会」。その日は夜須での取材もありました。夜須・舞川間の往復で走行距離100キロ以上…。市内をまわっただけで、これほどの距離を運転することになるとは思いませんでした。舞川の紅葉は格別きれいですよ！(N)

《広報へのメール》

kouhou@city.kochi-konan.lg.jp
《香南市のホームページ》
<http://www.city.kochi-konan.lg.jp>